

英語に堪能な若手小学校教師の英語音声指導観の変容過程②

発音の多様性に関する省察的語りにも焦点をあてて

和田 あずさ・ナットチー 直子

1. 問題の所在と研究の目的

小学校の英語音声指導に携わる教師が、豊かな文脈に根差した「教室の事実」をいかに意味付け、「実践的知識」を獲得していくかを紐解くためには、教師の語りが重要な手掛かりとなる。このような先行研究には、小学校教師の言語教師としての成長過程を詳らかにした中村・志村（2011）、カリキュラムの変化に伴う小学校教師の心理的な揺らぎを描述した小林（2021）、音声指導の背景にあるポリティクスと実践とのつながりを明らかにした大石（2021）などがある。「教室の事実」についてより深い洞察を得るためには、「いまここ」の授業実践に即した省察を継続的に行い、実践中の心的過程を微細に捉えながら「語り」の意味を理解することが求められる。

このため第一発表者（以下、観察者）は、複数の教師を事例とし、経年的に授業の参与観察と省察インタビューを実施し、小学校の英語音声指導にまつわる「教室の事実」の深い理解に努めてきた。第二発表者（以下、授業者）はこのうち、中学校・高等学校の英語科教員免許を有し、英語に堪能な若手非常勤講師である。2022年度での取り組みでは、授業者の主體的な内省がうかがえる語りが増え、授業と並行しながら自らの発音や指導の内容及び方法を振り返る視点が授業者に芽生えてきた。加えて、授業の省察では、インタビュアーとインタビュー어의対話によって一連の語りが構築される。つまり、インタビューーはインタビュアーとの関わりをとおして自らの内面に向き合い、インタビュアーはインタビュー어의語りから新たな気づきや疑問を得ることで研究の視点を見直していく。以上から観察者と授業者は2022年度より、語りの解釈を共有し、授業者自らが英語音声指導に関する自らの語りをどのように解釈し、再定義し、何を学び、一教師としてどのように成長するのか、ということ明らかにすることを研究の主題に加えた。本発表では、和田（2022）で導かれたテーマを発展させた「英語発音に関する多様性」に関わる省察的語りを解釈的に分析し、英語音声指導に携わる教師の信念の形成や変容を端緒とした「小学校教師の言語教師としての成長」または「言語教師の小学校教師としての成長」の過程を探究する。

2. 研究方法

授業者はアメリカの大学院に進学し、大学や高等学校で日本語と日本文化を教えた経験を持つ。帰国後1年間は小中学校の英語支援員や高校の英語プレゼンテーションの講座の講師を務め、そのうち小学校で非常勤講師として外国語活動と外国語科の専科として勤務している。授業者は、「言葉と文化は切り離せない」「小学校はあくまで「英語科」ではなく「外国語活動」「外国語科」としての位置づけである」「チャレンジングな部分はたくさんあるが、今ある贅沢な環境を最大限に児童の学びへとつなげたい」との考えを有している。

観察者は、2022年8月31日から2023年3月10日まで、授業者が担当する第3、4学年の外国語活動及び第5、6学年の外国語科授業を継続的に観察し、ビデオでの録画、レコーダーでの録音、フィールドノーツの作成を行った。また、観察者と授業者は、授業後や長期休み前、年度末などに、授業者にとって可能な範囲で、授業に関する協同的な省察（以下、振り返り）を行った。

そして観察者は、各種データから省察の逐語録を作成し、何度も読み込んで、内容、声色、口調などから全体的な印象を捉え、これまでの授業者との研究から導かれた「発音の多様性」に関する授業者の語りに着目して、暫定的な解釈を行った。この解釈を観察者と共有し、解釈の妥当性を検討した。本研究では、省察の中で繰り返し話題に上った「発音の多様性」に焦点をあて、本年度に観察者が実地調査を開始した直後の省察と、特に授業者が「発音の多様性」を意識した2つの授業内エピソードとそれに関連する3つの「語り」に着目する。なお本稿では、匿名化、発話の内容の補完または省略、などの処理を行ったうえで、逐語録を引用する。

3. 授業者の「語り」の解釈

（1）事例1：多様な発音に対するNSの反応

10月12日の振り返りで授業者は、前任のALTで英語のネイティブスピーカーであるB先生が授業に参加をした時の、ノンネイティブスピーカーであるA先生の発音への反応について、以下のように語っている。

A先生のいつもの発音、アメリカ英語を習った日本人からしたらちょっと違和感というか、いつも話す、そういうのが出てきた時に、B先生がずっとリピートしてたので、どういう反応するかなって注目してたんですけど、意外と、びっくりするほど、何事もなかったかのように、聞いて自分の発音でばんって言ったんです

よ。(中略)で、子供たちは一緒にB先生と言うから、その時点ではB先生の発音を聞いてないから、A先生の発音と、カタカナにもある言葉だから、自分の知識、B先生と同時に話す時に入ってくる音っていうので、なんかうまくいったので、答えはそこなのかなって。私いつも悩んで、私は私が思う発音を子供たちにしてっていう話してたんですけど、「あ、それでいいのかな」って思ったっていうことと、やっぱり私ではないネイティブのB先生が違和感なくA先生の英語を「お？」っていうのも1回もなく笑顔で対応してたっていうのも、やっぱり世界共通の英語でいいんだし、でもだからと言って自分が合わせることもなく、子供たちも自信を持ってA先生もB先生も発音してるから自分たちもって感じの空気が流れたので、なんか小学校の英語に関して、特に低学年はそれが正解なのかなって思ったっていう話をしたかったです。

A先生と授業者の発音が異なることやそれに気づく児童もいることに関連して、世界共通語の英語として多様な発音を認めるならば、ALTの発音を気にしないようにすべきであると考えていることに、これまで授業者は言及してきた。しかし、B先生がA先生の発音に対し一切の違和感を示さなかったことに、授業者は自身が抱えていた葛藤に対する一つの答えを見出している。しかしこのことを換言すると、授業者は英語として容認できる発音であるかどうかの判断をネイティブスピーカーであるB先生の判断をよりどころにしているとも考えられる。これは、「私ではないネイティブのB先生が」という語りに現れる、「ネイティブスピーカーのB先生」と「ノンネイティブスピーカーの授業者自身」という対比からもうかがえる。

(2) 事例2：児童の率直な反応から生じた新たな葛藤

次の事例は、中学校のALTであるC先生が参加した5年生の授業で、C先生のhundredの発音で/h/が脱落していることに児童が気づき「どっちなん？(C先生と授業者やデジタル教科書音声のどちらの発音が正しいのか、またはどちらで発音すればよいのか、の意)」と尋ねたことに関する、1月13日の振り返りである。

そこめっちゃ突っ込まれるだろうなって思って、私もそれ昨日言いたくて、でもまとまらなくて、またって思ってたんですけど。うーん、本当にいい意味で豪華というか、バラエティが。(中略)今回C先生が来てくれたことはありがたいっていうのは大前提で、(中略)あの質問はごもっともだし、鋭かったし、でもC先生を目の前にして、誤解される言い方もしたくないし、っていうのがやっぱり一番に来たので。で、A先生とも私も違う、C先生の発音、結構誰が聞いても分かる違いだったじゃないですか。で、「えっ」ってなったと思うんです。それをもう否定することもできないし、でもだからと言って私は私の発音でやるっていうのはやっぱりぶれたくないので、もう聞いたままに言ったらいいよっていうしかなかったっていうのが本音ですね。気づいてくれたのはすごい嬉しいし、そんだけちゃんと聞いているし耳もいってことだなって評価したのと同時に、短期でC先生と一緒にやるから流してもらえらんだったら流してくれた方が、めっちゃ勝手な話ですけどよかったな、とは思ってますけど。(中略)そのあと発音記号を確認してもやっぱり/h/は消えないし、英語の発音として、うん。でも聞いたままに発音してっていったら、それが子供が「オン」に聞こえらんだたらそう発音してもいいし、とは思いました。

この事例では、モデルとなる発音が複数あることに対する児童の戸惑いに端を発し、授業者自身やA先生よりも「英語らしい」発音の特徴を持つC先生の存在がありがたい、多様な発音を尊重したい、などの思いと、悪意なく差異に反応する児童の姿によって意図せずC先生を傷つけてしまうのではないかという懸念から、再度葛藤が生じていることがうかがえる。また、児童の発言に対して明確な考えを持って応答することができなかったこと、そしてこの時点でも何が最適な対応だったかについて結論を導き出せていないことがわかる。

(3) 事例3：多元的な自己から生じる葛藤

最後に、発音の多様性というテーマを起点とし、児童の英語の学びと人格の陶冶、ALTや学級担任との同僚性や信頼関係などの諸課題が複雑に関連し合うことで、授業者自身がこれまで以上に思い悩みながら実践に携わってきたことがわかる、2月3日の振り返りを以下に取り上げる。

一番最初に小学校英語に関わり始めた時に、やっぱり私はアメリカに10年間住まわせてもらって、いろんな英語を聞いて、「あ、日本語英語でもコミュニケーションがとれるんだ」って学んだし、そこはすごく大きかったしeye openerだったわけで、日本はいろんな外国人の人が英語を話すようになってきているにもかかわらず、やっぱりアメリカ文化、イギリス文化がまだまだ他の文化と比べて(重視されていることに)私、すごく違和感が

あって。だから（中略）いろんな英語がある中で自分の英語を確立してコミュニケーションが取れたらそれが100点だよって子供には伝えたい、そこはずっとあるので、最初から。だからA先生、C先生の英語を開けるのはすごいありがたい環境だと思うし、ただそこに行くまでの道が、子供たちにとって混乱して、ほんとに英語やだつてならないようにしなきゃな、とはすごく思います。（中略）ただ、一講師として、3、4年生は週1回、5、6年生でも週2回しか関われない。自分自身の強い確固たる理想は強くあります。でもこの学校で「これに向かって目標に掲げていこう」って言っても、他の国の文化の話をする（英語の授業に関わる）それぞれの教師の考えていることも浮き彫りになるし、自分の思ったままに、信念だけ掲げて突き進んでいっていいものなのかって、自分に何度も問いかけながらやった年だったので。（中略）英語のクラス、所詮英語のクラスですけど、やっぱり所詮ではないので、私の中では。英語教育、文化教育、国際教育、なので、すごく慎重に考えなきゃなあって思う部分があります。（中略）それが私なので、文化を学んで、ことばを学んで、他者を尊重しながら生きていくためには他（の文化）を取り入れてってっていうのは人間として大事だと思うので、一英語講師ではなく、たぶん担任の先生になってもそうだと思うし、子育てもそうなんですよ、結局は。でもそれがほんとに求められているかっていうと分からないなっていうジレンマがあります。

ここでの語りには、①多様な発音が認められるのを実感した「ESLの経験者」として、児童には一部のネイティブの発音にこだわらず、自分自身の英語を話してほしいという信念と、②言語や文化の差異を超えてお互いを認め尊重し合う児童を育てたいという、一教科・領域の枠を超えた、「教師として」あるいは「子供と向き合う一人の大人として」の信念、③「専科教師として」児童の英語の学びをより確かなものにしなければならないという信念、④ALTや学級担任など、授業に関わる様々な教師の思いを受け止め、調和させようと模索する立場から、自分の信念だけを貫き通してよいのかという迷い、⑤学級担任でも常勤でもない立場で、今授業者が抱く信念は学校という一組織の中で与えられた役割を超えたものなのではないかという迷いなどが混在している。

4. 総合考察

授業者の「英語専科」という枠組みを超えた一教師としての願いは一貫し、それは年々強まっている。しかし、「発音の多様性」を認めたい、認めるべきとする思いと、授業者、A先生、C先生の発音の違いや、それに対する児童の率直な反応を授業の中でどこまで取り上げるかという課題との間に、これまで以上に明確な葛藤が生じるとともに、「専科教員としての役割は何か」という問いに直面している。また、「発音の多様性を教室でどの程度認めるか」という明確に練引きできない問いに対し、ネイティブスピーカーを規範としている一面がある一方で、「アメリカやイギリスの英語だけが英語ではない」とし、ネイティブスピーカーを発音判断の唯一の基準としているわけではないと考える一面もあり、この点についても授業者がまだ言語化しきれない葛藤がみられる。ただし、一連の葛藤の過程の中で授業者が自らの自己の多元性に気づくことは、教師としての視野の広がりにつながることもいえる。さらに、reflection-on-actionの営みとおしてreflection-in-actionが行われるようになってきていることから、授業者に反省的実践家としての実践的思考が芽生えていることもわかる。このような迷いや問いを抱えながら、今後いかに授業者が自分自身、児童、同僚教師と向き合い、英語音声指導に携わっていくか、また、研究という客観的な視点から自らの実践や内省を捉え直すことが、授業者の教師としての成長にどのように寄与していくかについて、引き続き観察者と授業者が協働しながら検討し、「教室の事実」のいっそう深い理解に努める。

5. 謝辞

研究協力校の先生方と児童の皆様へ、心より御礼申し上げます。なお、本研究はJSPS科費費GA20K13134の助成を受けたものです。

引用文献

- 大石海（2021）．「音声指導のポリティクスを生きる小学校教師」『言語文化教育研究』第19号，74-94．
- 小林悠（2021）．「小学校英語専科教員の教師認知—英語教育を推進するX区のJTEの変容—」『論集/青山学院大学院文学研究科英米文学専攻』第45号，19-50．
- 中村香恵子・志村昭暢（2011）．「小学校教師における言語教師としての認知研究：小学校英語活動に意欲的な教師の経験と学びから」『JACET言語教師認知研究会研究収録』1，58-72．
- 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編』開隆堂出版．
- 和田あずさ（2022）．「英語に堪能な若手小学校教師の英語音声指導観の変容過程①—授業者による語りの「揺らぎ」に焦点をあてて—」『JAILA Journal』第9号，56-67．